

[A年] 降誕節第1主日(2024年12月29日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 60章1～6節**

- 1 起きよ、光を放て。
 あなたを照らす光は昇り
 主の栄光はあなたの上に輝く。
- 2 見よ、闇は地を覆い
 暗黒が国々を包んでいる。
 しかし、あなたの上には主が輝き出で
 主の栄光があなたの上に現れる。
- 3 国々はあなたを照らす光に向かい
 王たちは射出出でるその輝きに向かって歩む。
- 4 目を上げて、見渡すがよい。
 みな集い、あなたのもとに来る。
 息子たちは遠くから
 娘たちは抱かれて、進んで来る。
- 5 そのとき、あなたは畏れつつも喜びに輝き
 おのきつつも心は晴れやかになる。
 海からの宝があなたに送られ
 国々の富はあなたのもとに集まる。
- 6 らくだの大群
 ミディアンとエファの若いらくだが
 あなたのもとに押し寄せ。
 シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。
 こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる。

【使徒書日課】 エフェソの信徒への手紙 3章2～12節

2あなたがたのために神がわたしに恵みをお与えにな
 った次第について、あなたがたは聞いたにちがいありま
 せん。3初めに手短かに書いたように、秘められた計画が
 啓示によってわたしに知らされました。4あなたがたは、
 それを読めば、キリストによって実現されるこの計画を、
 わたしがどのように理解しているかが分かると思いま
 す。5この計画は、キリスト以前の時代には人の子らに
 知らされていませんでしたが、今や“霊”によって、キリ
 ストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。
 6すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスに
 おいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ
 者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるど
 うことです。7神は、その力を働かせてわたしに恵み
 を賜り、この福音に仕える者としてくださいました。8
 この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない

者であるわたしに与えられました。わたしは、この恵み
 により、キリストの計り知れない富について、異邦人に
 福音を告げ知らせしており、9すべてのものをお造りにな
 った神の内に世の初めから隠されていた秘められた計
 画が、どのように実現されるのかを、すべての人々に説
 き明かしています。10こうして、いろいろの働きをする
 神の知恵は、今や教会によって、天上の支配や権威に知
 らされるようになったのですが、11これは、神がわたし
 たちの主キリスト・イエスによって実現された永遠の計
 画に浴うものです。12わたしたちは主キリストに結ばれ
 ており、キリストに対する信仰により、確信をもって、
 大胆に神に近づくことができます。

【福音書日課】 マタイによる福音書 2章1～12節

1イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムで
 お生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の
 方からエルサレムに来て、2言った。「ユダヤ人の王と
 してお生まれになった方は、どこにおられますか。わた
 したちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たので
 す。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エル
 サレムの人々も皆、同様であった。4王は民の祭司長た
 ちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれる
 ことになっているのかと問いただした。5彼らは言った。
 「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。
 6『ユダの地、ベツレヘムよ、
 お前はユダの指導者たちの中で
 決していちばん小さいものではない。
 お前から指導者が現れ、
 わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」
 7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄
 せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、
 その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。
 わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出し
 た。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た
 星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まっ
 た。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家
 に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らは
 ひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、
 没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのと
 ころへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通
 って自分たちの国へ帰って行った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書60章1～6節

- 1 起きよ、光を放て。
あなたの光が来て
主の栄光があなたの上に昇ったのだから。
- 2 見よ、闇が地を覆い
密雲が諸国の民を包む。
しかし、あなたの上には主が輝き出で
主の栄光があなたの上に現れる。
- 3 国々はあなたの光に向かって歩み
王たちはあなたの曙の輝きに向かって歩む。
- 4 目を上げて、見渡してみよ。
彼らは皆集って、あなたのもとに来る。
あなたの息子たちは遠くから来て
娘たちは脇に抱えられてやって来る。
- 5 その時、あなたはそれを見て輝き
心は喜びに震える。
海の宝があなたにもたらされ
国々の富があなたのもとへやって来る。
- 6 らくだの大群
ミデヤンとエファの若いらくだが
あなたのもとに押し寄せる。
シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来て
主への賛美を告げる。

エフェソの信徒への手紙3章2～12節

- 2あなたがたのために私に与えられた神の恵みの計画〔別訳→務め〕について、あなたがたは確かに聞いたはずです。3初めに手短かに書いたように、啓示によって秘義〔神秘〕が私に知らされました。
- 4あなたがたは、それを読めば、私がキリストの秘義をどのように理解しているのかが分かります。
- 5この秘義は、前の時代〔直訳→他の時代〕には人の子らには知らされていませんでしたが、今や霊によってその〔別訳→神のノキリストの〕聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。6すなわち、異邦人が福音により、キリスト・イエスにあって、共に相続する者〔別訳→共同相続人〕、共に同じ体に属する者、共に約束にあずかる者となるということです。7神は、その力を働かせて私に恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。8この恵みは、すべての聖なる者のうちで最も小さな者である私に与えられました。キリストの計り知れない富を異邦人に告げ知らせ、9すべ

てのものを造られた神の内に永遠の昔から〔別訳→世々〕隠されていた秘義がどのようなものであるかを、すべての人に明らかにするためです。10こうして、神の豊かな〔直訳→多種多様の〕知恵が、今や教会を通して天上の支配や権威に知らされるようになったのですが、11これは、神が私たちの主キリスト・イエスにおいて実現してくださった永遠の計画に沿うものです。12キリストにあって、私たちは、キリストの真実〔別訳→キリストへの信仰〕により、確信をもって、堂々と神に近づくことができます。

マタイによる福音書2章1～12節

1イエスがヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、東方の博士〔別訳→占星術の学者〕たちがエルサレムにやって来て、2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4王は祭司長たちや民の律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

- 6『ユダの地、ベツレヘムよ、
あなたはユダの指導者たちの中で
決して最も小さな者ではない。
あなたから一人の指導者が現れ
私の民イスラエルの牧者となるからである。』
- 7そこで、ヘロデは博士たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、こう言ってベツレヘムへ送り出した。「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。私も行って拝むから。」9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子がいる場所の上に止まった。10博士たちはその星を見て喜びに溢れた。11家に入ってみると、幼子が母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香〔フランキンセンス〕、没薬〔ミルラ〕を贈り物として献げた。12それから、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分の国へ帰って行った。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・12月29日「降誕節第1主日」の日課主題は「東方の学者たち」。「降誕日」(12月25日)後の主日を、伝統的な教会暦を用いる主流教会では、「聖家族の主日」として記念する。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、異邦人にまで及ぶ主の栄光の到来を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、異邦人に福音を告げる使命を語る箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、主イエスの降誕物語の中でヘロデの男児虐殺事件にまつわる逸話を物語る箇所。

旧約日課(イザヤ 60章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。本書の概要は、過去の資料「聖書と祈りの会 241127」、「同 241204」、「同 241218」を参照。日課箇所は、同資料「同 241204」で扱った旧約日課箇所(59章)に続く箇所。

・「イザヤ書」後半のいわゆる「第二イザヤ」(40章以下)は、「バビロン捕囚」が終結していった時代を背景として告げられた預言集として解釈されてきた。この時代、キュロス王率いるペルシア帝国が台頭し、バビロニア王国は崩壊(前539年頃)、オリエント世界全域を統一する巨大な帝国世界が出現しつつあった。この時代に、バビロンに移住していたユダ王国末裔の王族・貴族に仕える旧エルサレム神殿祭司集団は、失われたエルサレム神殿でかつて継承されていた諸伝統の正統な継承者であることを示すために、「正典」の編纂事業に取り組み始めたと考えられる。ペルシア王に任命派遣されてユダヤ地方の統治を担うことになった旧王族・貴族らは、彼ら祭司集団の権威を自らの統治に利用すべく、彼らの求める神殿再建事業にも取り組むことになったのであろう。これにかかわった祭司集団は一枚岩ではなかったと推認されるが、その中に、前8世紀の南王国ユダで四代の王に仕えた宮廷預言者「イザヤ」を師範と見て、その預言者的伝統を継承することを自認する者たちがあり、彼らは、元来の「イザヤの預言の書」に付属する形で自分たちの「預言集」を付加した「イザヤ書」を編纂したと推察される。彼らの目指したものは、単にかつてユダ王国の国家聖所として営まれていたエルサレム神殿の宗教を復興することに留まらず、諸国民をも糾合しうる世界宗教の構築であった。ペルシア帝国という統一世界の出現は、偏狭な民族主義的アイデンティティを相対化し始めていただけでなく、メソポタミア・カナン・エジプトで受け継がれていた諸部族神に起源を持つ神々の合従連衡によって形成された宗教とは異質の超越神的なペルシア的宗教世界の優位性を示すものともなっていた。「イザヤ」の時代以降に始まっていた宗教思想の拡大・普遍化は、「第二イザヤ」の担い手らによって一気に進められたと考えられるのである。

ただし、そのような思想的跳躍は、容易に受け入れられるものではなかったかもしれない。「第二イザヤ」で繰り返し取り上げられる「主の僕」なる者の描写は、彼らの祭司グループが不遇の時期を過ごした記憶の名残であるかもしれない。

・6節で取り上げられる「ミディアン」、「エファ」および「シェバ」は、アラビア半島西方でよく知られていた部族集団で、元来は遊牧民であったものが隊商貿易により富を蓄積するようになっていた者たちであったと考えられる。「ミディアン」は、「創世記」の「ヨセフ物語」や、「出エジプト記」の「モーセ物語」でも現れる。「エファ」は、「ミディアン」の一系統か(創 25:4)。「シェバ」は、「列王記上」の「ソロモン物語」にも現れる。なお、アフリカのキリスト教国エチオピアには、「シェバ」の女王を介してダビデ王家の家系がエチオピアの王統に受け継がれたという伝承が知られる。この節の叙述は、新約「マタイによる福音書」2章の占星術の学者たちによる幼子の訪問・礼拝の伝承と結びついている。

使徒書日課(エフェソ 3章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第5に置かれた書簡文書。パウロは、独自の宣教団を組んで取り組んだマケドニア伝道、またローマの教会共同体出身者らと取り組んだコリント伝道を経て、使徒ら主流派と和解した結果、エフェソを活動拠点としていたが、そこで発生したもめ事を避けるためにエフェソを離れた後に、この書簡を著したと見ることができる。なお、一部の聖書学者は、本書簡をパウロの真筆と認めず、パウロの後継者らの手によるものとみなすが、『聖書』は本書をそのような文書として読まれることを求めている。

・「エフェソ」は、紀元前600年にまで遡る都市で、古典ギリシア時代にはギリシア都市国家(ポリス)の一つとして名を知られるようになり、また壮麗なアルテミス神殿が建立されたことでも知られる。アテネと並ぶギリシア文化の伝統継承地であるが、初期教会時代から教会共同体が形成され、ローマ帝国内三大都市に次ぐ諸教会ネットワークの拠点となっていたとされる。本書簡では、ユダヤ人と異邦人の間にそびえていた「隔ての壁」(2:14)が取りのけられたことにこそキリストの意義があるとの主張が示されており、パウロ的な普遍主義に立つ共同体形成が積極的に取り組まれていたと推認される。

・3節、4節、9節「秘められた計画」の原語「ミステリオン」は、「パウロ書簡」で特異的に用いられる語で(新約 28 例中 21 例)、新約中の残りの用例のうち 4 例は「ヨハネ黙示録」中に見られる。3 節「啓示」の原語「アポカリュプシス」も、「パウロ書簡」で特異的に用いられる語で(新約 18 例中 13 例)、「ヨハネの黙示録」の標題「黙示」もこの語。本書簡では、この「秘められた計画」の「啓示」を、異邦人が福音によってユダヤ人と共に同じ約束を受け継ぐ者であることを示すものとして位置づけている。

福音書日課(マタイ2章より)

・日課箇所は、「主イエス降誕物語」の中で「東方の学者たちの来訪」の説話伝承物語の箇所。主イエスの降誕逸話は、1章ですでに一旦完結しているが、「マタイ」はあらためて「民話伝説譚」的な降誕物語を付加して置いている。この伝承物語は、2章全体で一つの者として構成されている。

・ユダヤ王国ヘロデ大王(在位=前37~4年頃)の時代に、その支配地において幼い男児を虐殺するような事件があったという記録は、知られていない。他方で、古来、神話・英雄伝説の定型として、誕生における命の危機が織り込まれてきたことが知られている。オリエント世界では、メソポタミアで最初のセム系支配者となった「アッカド」の最初の王サルゴンの伝承にも、同様の逸話が含まれている。また、ギリシア神話では、「アポロン誕生譚」で蛇神「ピュトン」に命を狙われていたとの設定が知られており、これは「ヨハネ黙示録」12章の「竜と女」の幻の下敷きになっているとも考えられる。このような「英雄誕生譚」を主イエスの誕生物語に適用したと考えることができるが、他方で、1章から問われている「ユダヤの王の正統性」の問題を提起する意図でこのような誕生物語が置かれていると見ることもできる。ヘロデ大王の「ヘロデ王家」は、前2世紀のマカベア戦争で王権を確立した「ハスモン王家」の断絶を受けて、その王権を継承する形で成立したが、両王家とも「ダビデ王家」とは無縁であり、イドマヤ出身のヘロデ大王に関してはユダヤ人としての純血性も問題視されていた。ユダヤ人社会において、ペルシア支配時代以降、「ダビデ王統」が実質的に意味を持ったことはなかったが、その盟主としての地位はなお共通認識として浸透していたと考えられる。当時、「ヘロデ王朝」体制に反対する立場の者たちの中には、「ダビデ王統」を担ぎ出して「ヘロデ王朝」を打倒することを目指した者たちもあった。実際の思惑は違えど、初代教会は、そのような「ダビデ王統」派の主張を自らのキリスト論に取り込むことを試みていたと考えられるのである。

来週の誕生日 (12月29日~1月4日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-268「朝日は昇りて」(= I 97)は、日本人が作曲し1881年版『讃美歌』から歌い継がれてきた。作詞は奥野昌綱(ヘボンの日本語教師、ブラウンの聖書翻訳助手などで活躍)。当初、木岡英三郎の作曲が付されていたが、1931年版から鳥居忠五郎の作曲で歌われている。

・21-278「暗き闇に星光り」(I 118「くしき星よ、やみの夜に」)は、19世紀イギリスで作られた公現日のための讃美歌。作詞者R・ヒーバーは、「聖なる、聖なる」(21-351)の作者。初行の「星 stars」は、原曲では「息子ら sons」。

・21-256「まぶねのかたえに」は、17世紀最大のドイツ語讃美歌作家と言われるパウル・ゲアハルトの作詞。曲は、J.S.バッハが1736年出版の歌曲集にゲアハルトの詞のために作曲寄稿した。

・21-180「去らせたまえ」は、「シメオンの賛歌」を歌う賛歌。スイスの宗教改革者J・カルヴァンの教会で音楽を担当したブルジョワが作曲し、カルヴァン編纂の「ジュネーブ詩編歌集」に収められてきた。

21-278「暗き闇に星光り」

Brightest and best of the stars of the morning

1. Brightest and best of the sons of the morning; / Dawn on our darkness and lend us thine aid; / Star of the East, the horizon adorning, / Guide where our infant Redeemer is laid.
2. Cold on His cradle the dewdrops are shining; / Low lies His head with the beasts of the stall; / Angels adore Him in slumber reclining, / Maker and Monarch and Savior of all!
3. Say, shall we yield Him, in costly devotion, / Odors of Edom and offerings divine? / Gems of the mountain and pearls of the ocean, / Myrrh from the forest, or gold from the mine?
4. Vainly we offer each ample oblation, / Vainly with gifts would His favor secure; / Richer by far is the heart's adoration, / Dearer to God are the prayers of the poor.

21-256「まぶねのかたえに」

Ich steh an deiner Krippen hier

1. Ich steh an deiner Krippen hier, / o Jesu, du mein Leben; / ich komme, bring und schenke dir, / was du mir hast gegeben. / Nimm hin, es ist mein Geist und Sinn, / Herz, Seel und Mut, nimm alles hin / und laß dir's wohlgefallen.
2. Da ich noch nicht geboren war, / da bist du mir geboren / und hast mich dir zu eigen gar, / eh ich dich kannt, erkoren. / Eh ich durch deine Hand gemacht, / da hast du schon bei dir bedacht, / wie du mein wolltest werden.
3. Ich lag in tiefster Todesnacht, / du warest meine Sonne, / die Sonne, die mir zugebracht / Licht, Leben, Freud und Wonne. / O Sonne, die das werthe Licht / des Glaubens in mir zugericht', / wie schön sind deine Strahlen!
4. Ich sehe dich mit Freuden an / und kann mich nicht satt sehen; / und weil ich nun nichts weiter kann, / bleib ich anbetend stehen. / O daß mein Sinn ein Abgrund wär / und meine Seel ein weites Meer, / daß ich dich möchte fassen!
5. Wann oft mein Herz im Leibe weint / und keinen Trost kann finden, / rufst du mir zu: „Ich bin dein Freund, / ein Tilger deiner Sünden. / Was trauerst du, o Bruder mein? / Du sollst ja guter Dinge sein, / ich zahle deine Schulden.“
6. O daß doch so ein lieber Stern / soll in der Krippen liegen! / Für edle Kinder großer Herrn / gehören güldne Wiegen. / Ach Heu und Stroh ist viel zu schlecht, / Samt, Seide, Purpur wären recht, / dies Kindlein drauf zu legen!
7. Nehmt weg das Stroh, nehmt weg das Heu, / ich will mir Blumen holen, / daß meines Heilands Lager sei / auf lieblichen Viole; / mit Rosen, Nelken, Rosmarin / aus schönen Gärten will ich ihn / von oben her bestreuen.
8. Du fragest nicht nach Lust der Welt / noch nach des Leibes Freuden; / du hast dich bei uns eingestellt, / an unsrer Statt zu leiden, / suchst meiner Seele Herrlichkeit / durch Elend und Armseligkeit; / das will ich dir nicht wehren.
9. Eins aber, hoff ich, wirst du mir, / mein Heiland, nicht versagen: / daß ich dich möge für und für / in, bei und an mir tragen. / So laß mich doch dein Kripplein sein; / komm, komm und lege bei mir ein / dich und all deine Freuden.

21-180 番「去らせたまえ」

Nunc Dimittis

Nunc dimittis servum tuum, / Domine, secundum verbum tuum in pace: / Quia viderunt oculi mei salutare tuum / Quod parasti ante faciem omnium populorum: / Lumen ad revelationem gentium, et gloriam plebis tuae Israel.